

# 伝統的なものづくりを通じた地域創造－和綿で紡ぐひとの環づくり－

研究組織：教育学部 准教授 佐々木和也（代表）

教育学部 教授 清水 裕子

エコ・ハウスたかねざわ 野村 恵子（NPO法人ふるさと未来Sou）

高根沢町住民生活部環境課 坂本 武志

協力：ケアハウス・フローラ、社会福祉法人陽向「陽だまり保育園」、

フリースペース・ひよこの家

## 事業の背景・目的及び意義

エコ・ハウスたかねざわ は高根沢町の環境学習の拠点として2002年に設置された。運営は町指定管理者であるNPO法人「ふるさと未来Sou」が行っている。申請代表者は、これまでエコ・ハウスを拠点に、高根沢町環境課との協働で、伝統染織を中心とした環境学習プログラムを開発し、定期的な学習会を開催することにより、環境意識の啓発を支援してきている。また、自主活動グループである「里山文化の会」を共同主宰し、そこで育った市民を各種イベントや出張講座等の講師として派遣できるまでになっている。さらに、これまでの活動に福祉的な視点を持たせようと、幅広い世代で伝統的な和綿の栽培を通して地域を活性化させる試みとして、在宅介護支援センターの農地を利用して和綿を栽培し、施設を利用する高齢者の園芸福祉活動として試験的に運営してきた。この事業を継続しつつ、和綿文化を継承していくために伝統的な「ものづくり」を通して、ひとの環づくりに寄与することを目的としている。つまり、循環型社会を形成していくには、人（ソフト）の還流が不可欠との町の姿勢と本研究のシーズは一致しているところである。

大学側の資産として、担当教員は衣生活科学領域を主たる専門としており、現在の社会システムでは、ほぼ外部化されてしまった衣生活を問い直

し、新たな時代創出のための生活者のあり方を研究している。最近では、衣生活環境における感性教育について、「ものづくり」の立場から教材研究を行っている。これまでも、附属小学校の総合の時間において、藍や綿といった伝統染織素材を用いた環境教育の実践研究や、保育園との連携で染織活動に関する実践研究等を展開している。

行政側の資産として、エコ・ハウスには前述した環境学習機能（教材提供／講習会／出張授業等）の他、リサイクルショップ機能、資源ごみ回収事業等を有している。本研究を実施する事前の取組みとして、2005年度から伝統染織を中心とした環境学習プログラムを共同で開発し、定期的な学習会を開催することにより、環境意識の啓発に務めている。

このような資産をもつ双方が継続的に共同研究として連携をすることで、地域の環境づくりを牽引するESD学習を推進してきたことは意義深いと考える。本研究では、介護福祉施設の所有する農地において、エコ・ハウスたかねざわの里山文化の会を中心に、和綿の栽培収穫作業を施設利用者と協働しながら、本来家庭単位で行われていた伝統的な伝承モデルを試案する。平成22年度には高根沢町で栽培した和綿のみで産着を試作した。このような製品づくりか可能かどうかをみるために、平成23年度は福祉施設での編織トレーニングを開始し、高齢者のレベルアップ効果は期待できるものの、個人差も大きく、最終的にどのような方向にもっていくかについて課題を残した。そこで本年度は、以下の2点について実践的研究を行った。

- 1 エコハウスたかねざわURL：  
<http://homepage3.nifty.com/ecohouse-t/>
- 2 里山文化の会URL：  
<http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satowiki/index.php?EcoHouse/>

### (1) 園芸福祉からみた和綿栽培の意義（継続）

和綿栽培に地域ぐるみで関わることにより、要介護者の福祉の意義を深めるとともに、地域での子育て環境づくりの一環として定着させる。また、今年度はフリースペース・ひよこの家との連携により、不登校児の学習プログラムを検討し、メンタルヘルス面における効果についても考察する。

### (2) 地域創造モデルの試案

伝統的な和綿文化を「ものづくり」の視点から見つめ直し、子どもの成長を祈願した被服製品を作り、町内で生まれる赤子に身につけてもらうという地域内伝承モデルを実現していくための体制づくりを進める。

## 進展状況

### (1) 和綿栽培と保育園・ひよこの家との連携



図1 和綿の播種の様子

和綿栽培は2008年に発足した「とちぎコットンボール銀行」（エコ・ハウスたかねざわ「里山文化の会主催」）が主として行っている。本年度は、高根沢町が運営する不登校の子どものフリースクール「ひよこの家」と地元の陽だまり保育園の協力を得て、栽培活動を計画した。図1は今年度の播種の様子であるが、今年度は日程の関係で高齢者の参加が少なく、子ども達の栽培体験的な場になってしまったが、不登校生徒と園児の和やかな関わりも生まれた。兄弟や祖父母関係が希薄になりがちな現代において、多様な主体が関わる事業の意味を見いだせるシーンの一つであった。しかし、安定的に異世代間の交流を促すには、主催側の継

続的な調整機能が必要である。さらに、町の土作りセンターが主催する「さつまいも」植え並びに収穫体験（全町的に毎年実施）のような、安定的な町財産との連携も考えられる。



図2 綿の収穫を楽しむ

10月には、播種と同じ団体で収穫祭を行った。収穫直前の台風の影響で綿の木が倒れ、収穫作業は大変であったが、保育園児及びひよこの家の生徒も積極的に行っていた（図2）。夏の暑さが十分であったので、収量は例年以上に多かった。この日は季節的には大変暑く、高齢者の参加は少なかった。また、本事業が始まって、年々在宅高齢者の体力は落ちているので、施設外活動には十分留意して行わなければならない事情もある。



図3 綿糸をつかったボンボンづくり

その間、園児へのプレゼントを動機付けにして、高齢者には綿糸でボンボンづくりを行ってもらい、ハサミを使った細かい作業の可否を確認した（図3、4）。なかなか円形に成形するのが難しい高齢者もいたが、1時間程度の作業には集中できていた。その後、園児の手遊びや遊戯で交流をうな

がし（図5）、昼食会を経て、ボンボンのプレゼントを行って閉会となった。



図4 出来上がったボンボンに満面の笑み



図5 年中児による手遊び歌

## (2) 地域創造モデルの試案

平成23年度は、編織物を手づくりすることを通して、地域の子ども達に関わることから生き甲斐が創出され、そのことが和綿文化を継承することに繋がることを手芸クラブの活動の中で共有した。本年度は、5月から12月まで、計8回の活動を行った。参加者は施設入居者とデイケアで通われる高齢者の約20名程度ある。施設内の自主サークルのため、毎回参加者数にはバラツキがあったが、本事業が始まって以降、主体的に取り組まれる方々は安定して参加されていた。そこで、その方々を中心に地域へ還元していく製品づくりを行い、そこまで到達できない会員には手芸を楽しむということを考慮して活動内容を設定していった。

初回は前節で述べた通り、綿の播種活動から始めた。土に触れる活動により、コミュニケーションを活性化し、子ども達との交流により、本活動への動機を高めることを意図している。手芸活動

は6月から始め、まずは糸を組んでストラップの紐を作る活動を2回取り入れた。2本の糸を交互に回転（入れ替え）させるという、非常に単純なスクリプトの繰り返しとなる。実際には、図6上のように、赤シールの反対側の白糸を外して、シール側を空いたところに入れ替え、次に青糸という具合である。単純ではあるが、順番を間違える、繰り返し作業に集中できないなど、高齢者の認知力・記憶力の差は大きい。しかし、組紐は編物と同様容易に戻せるため、何度も繰り返して完成させることができる。最終的には全員が完成させることができ、達成感からくる笑みが印象的であった（図6下）。

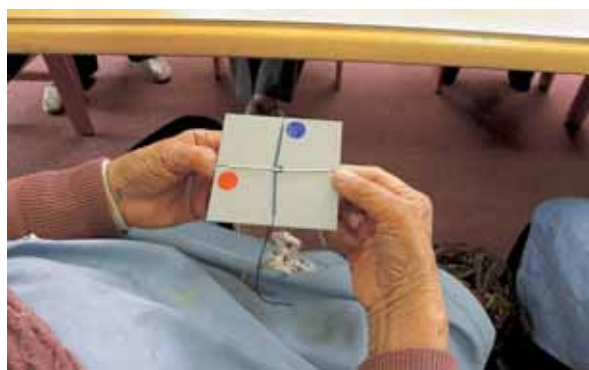


図6 四つ組みによる紐作りの様子

9月から昨年度行った指編みを再開した。昨年度の取り組みで作業療法的効果があることが認められ、特別な道具も必要ないため、地域へ還元する手芸品を編物と定めた。まずは、指編みの基礎であるリリアン編みを復習し、順序性・規則性を理解しながら、指先ならびに関節の柔軟性を取り戻すことに傾注しながら作業してもらった(図7)。



図7 指リリアン編みの復習の様子

10月は前節で述べた収穫祭であり、子ども達へのプレゼントとして綿糸を利用したボンボンづくりを行った。11月の活動では、復習を兼ねて自分のボンボンづくりを行った。



図6 ボンボンづくりの様子

これを応用して、9月から編み貯めてきた編地を帽子に仕立て、ボンボンをつけて完成させていく。帽子に仕立てるためには、編み針でリンクさせていく必要がある。若い頃に編物を経験されていた方は自分で仕上げられるが、そうでない場合は、里山文化の会の会員とケアハウスの職員が支援しながら作業を進めた。



図7 ウール帽子づくりの様子



図8 地域へ還元する帽子づくりの様子

異なり糸に伸縮性がないため、編む作業が難しい。12月の最終回までに編んでもらうことになった(図8)。そして、最終的に4つの帽子が完成し、

後日、本活動に協力いただいた保育園の新生児にプレゼントした(図9)。今回は、里山文化の会で取り上げた茜で染色した綿糸を利用した。色の違いは媒染剤を変えてあるためである。



図9 帽子を贈られた母子

### 事業の成果

本年度は、ここ数年展開してきた和綿を用いたものづくりによる地域活性化として、指編みによる帽子づくりを行い、高齢者の手芸品を地域に還元するモデルを試案することができた。元来、衣生活は家庭内の手仕事として定着していたが、現状の生活環境からは想像することもできない。しかし、本事業で展開したような取り組みが、それぞれの地域で育まれてきた和綿文化を地域内で伝承していくきっかけになれば幸いである。その過程で明らかになった編織作業による福祉効果は、地域の高齢化に対応する研究領域のシーズとなる可能性もある。

一方、自治体側の成果としては、これまでエコ・ハウスの里山文化の会のための環境教育プログラ

ム「糸から衣生活を見直す」「衣生活から共生をめざす」「糸にいのちを吹き込む」をベースにし、地域の活性化に寄与する活動実践を行うことができた。今年度も、フリースペース・ひよこの家の自立支援を、和綿栽培を通して促す可能性も広げることができた。そして、高齢者の編織作業の考案・指導を主として会員が行うことで、会員相互のやりがいも大きくなってきている。これらは町の協働による手間ひまかけた地域づくりの方向性に合致した市民教育に貢献するものである。